

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 東方學, 東方學會, 第一輯 昭和二十六年三月, 第二輯 昭和二十六年八月   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 和田, 博徳(Wada, Hironori)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1952  |
| Jtitle           | 史学 Vol.25, No.3 (1952. ) ,p.172(427)- 175(430)  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 書評  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520000-0172">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520000-0172</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

擧げられ、灰色繩蓆文尖底土器、無文高杯豆、鬲、鼎などの土器片があり、五銖、貨泉、大泉五十なども見られる。なお後代の遺物も多いが、こゝでは省略することとする。

上記の如く本書は魯の舊城址を推定し、前漢の靈光殿址を發見するといふ稀に見る成果を録したものであり、まことに貴重な報告書と云うべきである。第一冊と共に國版の鮮明な點は嬉しいことである。たゞその調査が甚だ小部分に止つてゐるのは如何にも残念であり、記述も簡でやゝ理解し難い點のあるのは遺憾であるが、これも今日では止むを得ざる所である。トロヤ、ミノスなどゝは比較にならぬとしても、中國に於いてもかような古い都市の調査が可能であることを示しただけでも比類少き成果であり、驚異に値する事實であろう。河北省邯鄲には趙の、易縣には燕の土城が残存しているということであり、今後どの様な發見がなされるか期待されるのであるが、恐らくなお時を要するのではないかと思われるのは残念である。

なお卷末に「中國西北ホリソングルの漢成樂縣址」という附録が附されて居り、綏遠南方約五十軒に残る大土城が調査の結果漢の成樂縣址、北魏の盛樂、遼の振武縣址と認むべき三ヶの土城から成つてゐることが論ぜられてゐる。

長々と駄文を弄したがこの二冊の研究報告書が有する意義は一應盡し得たかと思う。東亞考古學に暗い筆者としてはこれを評す

ることも出来かねるので、紹介として記述を試みたのであるが、未だ入手閲讀の機を得ない方々に何等かの参考ともなれば幸いである。(清水 潤三)

## 東方學

東方學會

第一輯 昭和二十六年三月  
第二輯 昭和二十六年八月

我が國の人文科學の中で、世界的水準を抜くものとして、東洋學がよく擧げられる。されば海外の學者が東洋のことを研究する場合に、我が東洋學の成果を参照せずしては先づ不可能に近いと言つて過言であるまい。故にかゝる成果の發表機關たる我が東洋學關係雜誌は獨り國內のみならず、外國にまで重きをなしてゐるのである。

しかし今次の戦争の結果はなべて學術雜誌の出版を困難ならしめたが、特に東洋への關心が一般に薄らいだことは愈々東洋學關係諸雜誌の刊行に打撃を與へた。かくて戦前永き傳統を有した「支那學」、「東方學報」東京、「東亞經濟研究」等を始め、多くの雜誌が廢刊の憂目を見たのである。幸ひ、「東洋學報」、「東洋史研究」、「東方學報」京都等は戦後に復刊したが、何れも停刊、遲刊などで、未だ到底、戦前の如き隆盛の域には達してゐない。

これは東洋學發展のために甚だ憂ふべき状態であるが、この時に當つて、本誌「東方學」が新に發刊されたことは戦後東洋學に一光明を投ずるものと言へよう。

本誌は昭和二十一年、我が國に於ける東洋學者を網羅して結成された東方學會の機關誌である。従つて、東京と京都に兩支部を置き、從來の諸雜誌の如く、一大學や一研究所にすることなく、且つ、史學・哲學・文學各部門は勿論、東方に關するあらゆる學者、學問を含めた眞に総合的な雜誌である。この點に本誌の特色があると言へよう。

本誌第一輯と第二輯の目次を擧げると次の如くである。

### 第一輯

#### 發刊の辭

大秦景教大聖通眞歸法讚及び

大秦景教宣元至本經殘卷について

玄菟郡考

印度支那北部の漢墓

祇教の支那初傳の時期

並にその初期弘通に就いて

張説の傳記と文學

洗禮簿を通じて見たるバタビヤの日本人

論語の成立

宇野 哲人

羽田 亨

和田 清

梅原 末治

石田幹之助

吉川幸次郎

岩生 成一

貝塚 茂樹

### 初期全眞教團の一性格

#### 第二輯

#### 讀易小記

經典釋文をよみて

宋學を導いたもの

西漢時代（紀元前二世紀間）の都市について

宋金時代に於ける莊園と佃戸の一考察

明清時代の蘇州と輕工業の發達

三國演義における佛教と道教

唐代小説について

中國青銅器文化の一性格

以下その内容を紹介したいが、こゝでは特に史學關係の論考のみに限ることとする。第一輯から掲載順に見て行くと、羽田亨「大秦景教大聖通眞歸法讚及び大秦景教宣元至本經殘卷について」は敦煌出土の二種の景教經典の研究である。先づ大秦景教大聖通眞歸法讚は耶蘇變貌日（八月六日）に唱へる讚美の稱であらうとする佐伯好郎博士の説に反對し、これは慈父が億兆の民を救ひ、善衆が眞に通じ、法に歸したのを讚美するものであらうとし、次に大秦景教宣元至本經は譯經ではなく、全く老子道德經第六十二章に基づいてゐることを明かにし、崇老の色彩の強かつた唐代に於ける景士の教義宣傳の苦心を認めるとしてゐる。最後に兩殘卷

窪 徳忠

宇野 哲人

武内 義雄

楠木 正繼

宇都宮清吉

周藤 吉之

宮崎 市定

小川 環樹

目加田 誠

關野 雄

の譏語は後世の附記であらうと推測してゐる。

和田清「玄菟郡考」は漢の武帝が置いた朝鮮四郡の一なる玄菟郡の沿革を論じたもの。玄菟郡は三度、その位置を變へたが、第三玄菟郡の治所は今の撫順、第二玄菟郡の治所は興京にあつたことを確かめ、第一玄菟郡の治所は從來の咸興説を排して輯安に初めから置かれたとする。そして玄菟郡とは扶餘と高句麗との連絡を遮断するために置いた郡で、初めは西は撫順から東は日本海に及ぶ狭長な地域であつたとする。

梅原末治「印度支那北部の漢墓」は先づ漢墓が東京デルタ周囲の丘陵と、安南北部ソンマ河下流域に分布し、その墓室は蒲鉾形天井をした長方形で、一人を葬つた單獨墓が多く、南シナの漢墓と相似てゐる。墳築墳のみで木室墳が発見されない等のことを明かにし、概してこの地方の調査は朝鮮の漢墓のそれに比して遅れてゐるから、今後の闡明に俟つ所が多いと述べてをる。

石田幹之助「祇教の支那初傳の時期並にその初期弘通に就いて」はザラトウーシトラ教の初傳は北の中頃で、次いで北齊・北周の世に行はれその宮廷にも信奉者を見出したが、その流風は惹いて隋を経て、更に唐初にまで及んだ。南朝梁も西域と交通があつたから、その信徒は存在したのであらうとしてゐる。

岩生成一「洗禮簿を通じて見たるバタビヤの日本人」はバタビヤ地方文書館所藏文書の洗禮簿に據つて、十七世紀初頭慶長年代

から元和末年にかけての日本移民の構造、即ち、その男女別、出身地、受洗者數等を明かにし、更に日本移民の動態をも論じてゐる。最後に洗禮簿を分類、翻譯して附録とする。

貝塚茂樹「論語の成立」は孔子の言葉が門人の間でどんな形式で保存され、そして何時それがまとめて論語といふ本に書かれるやうになつたかを考へたもの。論語二十篇の中、「季子」、「陽夏」、「微子」の三篇は文體が異なることから推して、戰國時代の儒教教團では一方において既に成文化された孔子の語録である『原論語』を書物として傳へるとともに、他方において孔子の言葉をば口頭で傳承してゐた。傳承は流動し、發展する。そしてこのやうな口頭で傳承された孔子の言葉を追加編輯したのが、「陽貨」等の三篇であらうとし、當時行はれた師弟傳授の禮について述べてゐる。

窪徳忠「初期全眞教團の一性格」は金代に起つた全眞教を金朝治下の不平漢人の徒輩の集りで、王重陽をその指導者と見る陳垣「南宋初河北新道教考」や清末の儒者陳教友の説を駁して、王重陽は決して金に不平をいだく宋の義士ではなく、金の侵入により荒廢した華北の難民を救はうとしただけであり、重陽自身は金の武舉に應じたりして、出世慾を持つてゐたが、現實と理想のくひちがひに失望して道教に入り、熱心な傳道者となつたものであるから、全眞教にはなんら、反國家的要素はないと斷じてゐる。

第二輯に入ると、宇都宮清吉「西漢時代（紀元前二世紀間）の都市について」は主として史記貨殖傳によつて、西漢の都市の戸口、經濟圏、物價、商業等の推定を試みたもの。西漢の農村人口と都市人口の此は六對三位であり、大都市が多くあつたこと、特に臨淄は最大で三十七萬の人口を有し、經濟圏も相當大きかつたこと等を推定し、商人活動の具體相と都市における物質生活の内容とを論じてゐる。そして活潑に活動した都市商工人も武帝時代の商人壓迫政策と鹽鐵の製作販賣權の政府による獨占以來、その勢力は後退し、また商工人自身は農村の莊園主に轉化していつたと言ふ。

周藤吉之「宋金時代に於ける莊園と佃戸の一考察」は唐の中頃以後、宋金時代に互つて益々發展した莊園とその耕作者佃戸について、特に長安附近に限つて考察してゐる。長安附近は先進地域で、大土地所有が發達し、莊園制が行はれ、佃戸制が一般した。

これらの莊園では佃戸が種子・農具を與へられて耕作し、毎畝一石以下五斗に至る重い租を負擔してゐたこと等を明かにしてゐる。

宮崎市定「明清時代の蘇州と輕工業の發達」は蘇州が工業都市として明清時代の中國に冠絶したことを述べる。蘇州は南宋頃から中國屈指の繁榮都市であつたが、明初に衰微した。成化頃より復興し、萬曆年間絶頂に達する。工業は特に染織業が盛んであつ

た。萬曆以後衰へて、康熙十年頃から復興した。乾隆以後また不景氣となり、阿片戦争後、上海の開港は愈々蘇州を衰へさせた。大運河を始めとする水利事業の興廢は、蘇州の繁榮と大に關係があつたとする。

關野雄「中國青銅器文化の一性格」は先秦時代の刀布は實體貨幣であつたと先づ斷定し、されば布が現れる前に農具のやうな大形青銅器の存在した筈はなく、青銅が貨幣として流通してゐる限り、青銅製の農具などが使用されることもあり得ないと言ひ、古代中國における青銅は支配階級の專有物で、彼等の權威を象徴する銅器や、その主權を擁護する兵器の類に限定され、庶民階級の間には最小限度に必要な利器と貨幣などが、用ひられてゐたに過ぎぬのであらう。つまり青銅器時代といつても、一般庶民はその恩恵に浴せず、農具などは恐らく木器から一擧鐵器へと移行したものであらうと論じてゐる。

以上極めて簡略に紹介したが、これだけでも本誌が我が東洋學界に於ける重要な専門誌であることは推測し得よう。なほ各巻とも巻末に内外の東洋學界の消息を傳へてをり、また石田幹之助教授による英文の梗概を附してあり、参照しながら讀むのに便利である。印刷や外装も美麗であり、編輯者の勞を多としたい。近く第三輯も續刊されると聞く。我が東洋學のために本誌の益々發展することを希望する。

(和田 博徳)